

国 内 研 究

「契約共同体」の神学と政治理念

田 村 光 三

Theology and Political Idea of the “Covenant Community”

Kōzō Tamura

—

宗教改革の後、プロテスタント諸教会は、その教会政治をそれぞれ、ルーテル派 (Lutheran)、長老派 (Presbyterian)、あるいは監督派 (Episcopal) のいずれかの形態を取っており、地方の小教会はそれぞれの上部教団の下で、限定された権限と特権をゆるされた「集会」(Congregation) とみなされていた¹⁾。

しかしながら、社会の構造や思想の変化の中で、信仰を同じくする会衆の集団が、上部教団の組織とは必ずしも関係なく、独自の立場で、理論的にも実践的にも、自律的・民主的な取りきめや行動をすることが必要となり、またその方がごく自然な姿であると考えられるようになってくると、のちの諸教会が求めていったような、いわゆる「会衆主義」(Congregational Way) が発展するようになる²⁾。ニューイングランドのように、ヨーロッパから遠くはなれていた「地の果て」では、実践上いきおい独自の方式を網み出さざるをえない立場におかれていたといえよう。

キリスト教会政治上、まったく新しい形態は、1648年にマサチューセッツのケンブリッジにおいて開かれた、ニューイングランドの四つの植民地の代表たちによる宗教会議において採択された「教会規律綱領」(A Platform of Church Discipline——通常これを「ケンブリッジ綱領」(Cambridge Platform) と呼んでいる——)によって、正式に公けにされたといつてよい。

プリマスからはじまって、マサチューセッツ湾、ハートフォード、およびニューヘイブンの四つの植民地は、入植から1646年頃までの間に、一つの主を信じるすべての会衆はキリストの直接的な指導の下では平等であるという聖書解釈に基づく教会組織の編成について、試行錯誤しつつ、独自の構想を練っていた。

これらの構想に共通する特長は、おおよそつぎの四つの柱にまとめることができる。

1. 地方の教会は、それぞれ明確なキリストの体として、自律性を持っていること。
2. 牧師はその教会の代表者であること。
3. 教会員は相互に契約関係 (covenant relationship) にあること。
4. 個々の教会は他の教会と相提携し、友誼的な相談にあづかる義務があること。

「ケンブリッジ綱領」はこれらの四大原理を基盤に、植民地生活の諸経験を加えて、教会の理念を明示的に公表したものにほかならない。

上に示した四つの原理の中で、地方教会の自治という原則はとくに強調され、ニューイングランドの教会生活のみでなく、のちのアメリカの政治、経済、社会生活全般にわたって影響をあたえつづけたことはいうまでもない。つまり、地方のグループの自律性を尊重する原則は、すべての政体は人民に由来し、政府のすべての機関は人民の意志を代表するものでしかないという、近代民主主義政体の伝統となっている。この「会衆主義の憲法」(the Congregational Constitution)³⁾ともいうべき「ケンブリッジ綱領」は、例えばのちにより広いナショナルな基本法ともいうべき「独立宣言」および「合衆国憲法」へと発展していったのはきわめて自然であったといえよう。

ピューリタンの歴史はイギリスの16世紀のおわりまで遡らなければならないが、その中でも「分離派」(Separatists) と呼ばれる最左翼のピューリタンが、信仰の自由を求めてイギリス本国をのがれ、オランダに移り、さらに1620年にはプリマスに入植して、彼らの理念にしたがって新しい宗教的・社会的制度の建設を試みたことは、すでに周知のことである⁴⁾。

「ピルグリム・ファーザーズ」(Pilgrim Fathers) と呼ばれたこれらのグループの指導者たちは、彼らの教会・社会組織を新約聖書に記されているような原始キリスト教徒の集会にかたどって、作り上げようとした。この指導者たちの信念によれば、当時のイングランドやスコットランドや大陸諸国に見られた教会制度は、主として「人の手によって作られた」ものであった。

それらの制度によって人々の信仰や生活を規制し、支配している限り、人間の生活や信教の自由を阻害するばかりではなく、神の栄光を表わすことにはならないと考えていた。

宗教改革は結局不徹底であり、司祭とか長老といった

新しい法王が君臨している限り、「新教」といえどもそれは新約聖書の教えに反するものであり、キリストの精神にもとるものであると彼らは考えていた。このように、「ピルグリムズ」たちは、のちにボストンやセイラムに入植したピューリタンたちとくらべて、事柄をより本質的に理解し、より深刻に考えていたといえよう。

このような認識をふまえて彼らは、約20年の間、イングランドのスクルービー (Scrooby) およびオランダのライデン (Lyden) において、ロビンソン牧師 (Pastor John Robinson) の下で折りつつ、ひとつの共同体形成の実験をしていた。メイフラワー号 (Mayflower) にのりくんだ百余人の一団は、このようなグループの先発隊というべき人々であった。彼らはケープ・コッド (Cape Cod) についた時、上陸に先立って船内で集会を開き、神のいましめの下に力をあわせて新しい教会と社会の形成について力を合わせることを誓約した。

その時ブラッドフォードによって手書きされた「メイフラワー誓約書」(The Mayflower Compact)⁵⁾は次に掲げる通りであった。

「神の名に於いて、アーメン。我等の統治者たる君主、又神意により英王国 (Great Britain)、フランス及びアイルランドの王にして又信仰の擁護者たるジェームズ王の忠誠なる臣民たる我等下名は、神の栄光のため、基督教の信仰の増進のため、及び我が国王と祖国の名誉のために、ヴァージニアの北部地方に於ける最初の植民地を創設せんとして航海を企てたものであるが、ここに本証書により、厳粛且つ相互に契約し、神と各自相互の前で、契約によりて結合して政治団体を作り (Covenant and Combine ourselves together into a civil Body Politik) 以て我等の共同の秩序と安全を保ち進め、且つ上掲の目的の遂行を図ろうとする。そして今後之に基き、植民地一般の幸福のため最も適当と認められる所により、随時、正義公平な、法律、命令等を発し、憲法を制定し、又公職を組織すべく、我等はすべて之等に対し、当然の服従をすべきことを誓約する。

A. D. 1620年、英王国、フランス及びアイルランド王としてのジェームズ王の治世の第18年、スコットランド王としての治世の第54年、11月11日、ケープ・コッドに於て⁶⁾

この誓約書には41人の男子が署名しているが、その中に「ミスター」の敬称がつけられた階層の人が11人含まれていた。

プリマスに上陸した「ピルグリムズ」たちは、まず彼らの集会所 (meeting house) を建設し、彼らの生活の中心として毎週の聖日礼拝を守った。この聖日礼拝は平

信徒であるブルースター (William Brewster) によって導かれたということは、のちの教会制度の性格形成に大きな意味をもつこととなった。彼らの霊的指導者であったロビンソン牧師は病氣のために同行出来ず、1625年に死去したことも、彼らのことばにしたがえば、神の特別の思いであったかもしれない。

しかし、「ピルグリムズ」たちがプリマスに入植して生活をはじめたのちも、ロビンソンは依然として彼らの霊的指導者であり、大西洋をはさんで彼は遠くから、手紙や伝言を通じて、荒野に生れたばかりの新しい集会の上に、深い愛情と熱い祈りと細やかな注意をつたえたのであった。

このプリマスのグループは、はじめから専任の牧師がいなかったために、制度的教会は発展せず、彼らの礼拝は、聖書朗読、祈禱、および短かいすめの言葉といった、原始キリスト教会の礼拝にならったものである。彼らは聖書の教えにだけはしたがうとしても、すべての「人の手によって作られた」制度や規則といったものからはまったく自由であった。しかしながら、彼らの試みはニューイングランドに発展した「会衆主義」の制度的発展にたいして、実際的な意味を持っていたというよりは、むしろ象徴的な意味を持っていたというべきであろう。

プリマスにおいては、まず聖職者ではない信徒の長老の指導の下に、自由な礼拝のために信仰を同じくする何人かの人々が集って、集会を持ち、そこに参加する人々の合意の上で作成された「契約」(Covenant)⁶⁾に基づいて教会形成が行なわれた。「契約」の下に一体として結合しあったことを確認したのちに、彼らは自分たちの手で教職者たるべき人を選び、一人を牧師に、他を教師として任命することになる。このような「民主的」な偏向のゆえに、プリマスの人々は母国のピューリタン指導者たちと折り合いが悪くなっていった。プリマスの指導者たちは「分離派」の中でも最左翼に属し、宗教的にも政治的にも社会的にも母国の紐帯からすでに離れ、いわば「地の果て」の荒野にとりのこされた孤児ともいえるべき境涯おかれることになる。

彼らには英国王の特許状はなく、教区牧師もなく、彼らの入植を支えた商人たちや、体制内的改革を試みていたピューリタンたちも、このプリマスの一団とかかわりたくないと思うようになっていた。

注

- 1) ニューイングランドのピューリタニズム発展の前提としての、英国および欧州の宗教事情についての文献は枚挙にいとまのないほどであるが、そのいくつかをあげるとつぎのようなものが手頃であるように思われる。

C. H. and K. George, *The Protestant Mind*

- of the English Reformation, 1570—1649*, Princeton, 1961.
- W. Haller, *The Rise of Puritanism*, N. Y. 1957.
- Christopher Hill, *Society and Puritanism in Pre-Revolutionary England*, rev. ed. London, 1969.
- Perry Miller, *Orthodoxy in Massachusetts, 1630—1650*, N. Y. 1933. [以下 Miller *Orthodoxy* と略記する]。
- M. Walzer, *The Revolution of the Saints*, Cambridge, Mass., 1965.
- Darrett. B. Rutman, *American Puritanism: Faith and Practice*, Phila. and N. Y. 1970.
- 2) ニューイングランドの「会衆主義」の発展については、
- D. A. White, *New England Congregationalism in Its Origin and Purity; Illustrated by the Foundation and Early Records of the First Church in Salem, and Various Discussion Pertaining to the Subject*, Salem, 1869.
- Williston Walker, *The Creeds and Platforms of Congregationalism*, N. Y. 1893.
- マサチューセッツにおけるピューリタニズムの初期の発展については、
- David D. Hall, *The Faithful Shepherd: A History of the New England Ministry in the Seventeenth Century*, Chapell Hill, 1972.
- George, H. Haskins, *Law and Authority in Early Massachusetts*, N. Y. 1960.
- Perry Miller, *Orthodoxy* (op. cit.).
- Edmand E. Morgan, *Visible Saints: The Story of a Puritan Idea*, N. Y. 1963.
- N. Pettit, *The Heart Prepared: Grace and Conversion in Puritan Spiritual Life*, N. H. 1966.
- Lazarar Ziff, *The Career of John Cotton: Puritanism and the American Experience*, Princeton, 1962.
- William T. Young, Jr., *Gods' Messengers: Religious Leadership in Colonial New England, 1700—1750*, Baltimore, 1976.
- 大下尚一訳・解説『ピューリタニズム』研究社, 1976.
- 3) William W. Sweet, *Religion in Colonial America*, N. Y., 1942, p. 82.
- 4) Ezra Byington, *The Puritan as a Colonist and Reformer*, Boston, 1899; do., *The Puritan in England and New England*, Boston, 1896.
- Henry O. Wakeman, *The Church and the Puritan, 1570—1660*, London, 1887.
- 5) 「プリマス」と「ピルグリム・ファーザーズ」に関しては、
- William Bradford, *History of Plymouth Plantation, 1606—1646*, in: *Collections of the Massachusetts Historical Society*, Forth Series, III, 1856; William T. Davis (ed.), *Of Plymouth Plantation*, in: *Original Narrative Series*, N. Y., 1908; 1959.
- Alexander Young, *Chronicles of the Pilgrim Fathers of Plymouth 1602—1625*, 1841, はブラドフォードの日記の一部に加えて、初期のプリマスの記録を含んでいる。勿論 N. B. Shurtleff ら編集の *Record of New Plymouth Colony*, 12 vols., Boston, 1855—1861, は包括的な資料集である。
- 最近のユニークな研究としては、G. D. Langdon, Jr., *Pilgrim Colony; A History of New Plymouth, 1620—1691*, N. H., 1956 および John Demos, *A Little Common Wealth: Family Life in Plymouth Colony*, N. Y., 1970. 等がある。
- 日本語の研究書もいくつかあるが、最近出版された佐瀬順夫『ピルグリム・ファーザーズの足跡』松柏社, 1980は原典を忠実に紹介している。
- 6) H. S. Commeger, *Documents of American History*, I, pp. 15—16.
- 『原典アメリカ史』, 第1巻, アメリカ学会訳編, 岩波書店, 昭和46年による。
- Arthur Lord, "The Mayflower Compact," *Proceedings of the American Antiquarian Society*, N. S. XXX, 1920, pp. 278—294.
- 6) "Covenant" の意義についてはのちにくわしく触れるが、さしあたり、
- Perry Miller, *The New England Mind: The Seventeenth Century*, N. Y., 1939, Chapter IV 参照。
- また "Covenant" の「タウン」の発展にたいする影響を興味深く取り扱っているものに、つぎのようなものがある。
- William Haller, *The Puritan Frontier: Town Planting in New England Colonial Development, 1630—1660.*, *Studies in History, Economic and Public Law*, No. 568, N. Y., 1951.
- Page Smith, *As a City Upon a Hill: The Town in American History*, N. Y., 1966.

二

1628年にセイレム (Salem) に入植しはじめ、ついでボソン (Boston) 周辺に定住するようになった「ピューリタン」(Puritan) たちの多くは、「ピルグリムズ」とはちがって、大てい中は産階層に属する人々であり、またチェサピーク (Chesapeake) や西インドの入植は若い男子が主力であったのにくらべて、家族集団であった。

1630年から1640年にかけてニューイングランドに渡った人々の内、ケンブリッジおよびオックスフォードの卒業生が90人以上もいたといわれている。主としてイギリス東部 (East Anglia) からきたこれらの入植者の多く

は、財産を持ち、「ジェントリー」あるいは教職者といった相当の地位につき、母国では彼らのプロジェクトを、すくなくとも当初は支援する強力な組織があった。

彼らはまた国王から好意的な特許状を得ることができた。また「ビルグリムズ」たちとは異って、彼らは決して難民ではなく、むしろ、「新しい」イングランドで、より聖なる教会と、より健全な市民政体を建設すべく、聖なる使命に燃えた神の尖兵であった。このような事情——同じ信仰と人口の均質性——を考えると、健全な政治と社会の構造がニューイングランドにおいて比較的早く成立しえたのも不思議ではない。

このことが英国王の特許状 (The First Charter of Massachusetts, March 4/14, 1628/9)¹⁾を比較的早い時期に植民地に移管し、湾植民地会社の本拠を英本国から植民地に移すことを可能にさせたのであった。1634年にいたってウィンスロップ (John Winthrop) たちは植民地にあたえられた特許状を植民地の実状と植民者たちの民意によって運用することになる。元来この特許状においては、各1名の総督 (Governor) と副総督 (Deputy-Governor)、および18名の参議員 (Assistants) が会社の株主すなわち自由民 (Freemen) によって毎年選出され、これらの役員と株主たちは年4回の総会 (General Court) を開いて、選挙を施行し、必要な法律や規則を制定するよう規定されている。しかし、ウィンスロップらは自由民は株主でなければならないという条件を排し、各タウンの自由民は総会に代議員 (Deputy) をおくる権利を規定することによって、植民地を貿易あるいは入植会社という性格からひとつの民国 (Commonwealth) 的な枠組を作り上げた。この時から特許状そのものがひとつの植民地憲法という性格を持つにいたり、自治的政体の原基ともなったのである²⁾。彼らは「分離派」として英国から逃れてきたのではなく、英国国教会 (Anglican Church) 内部でのピューリタンの廓清運動の一波として新世界に入植したのであった。当時の多くのピューリタンがそうであったように、彼らも国教会が真の教会であることについては疑いを持たず、ただそれを真の教会にふさわしく清め、再建しようと願っていたが、心ある指導者たちは、当時の宗教的・政治的教会はそのままではこれ以上改革することが出来ないのではないかと感じていたのであった。

ある人々は、新天地アメリカにおいては、あるいは清められた真の国教会を形成することができるかもしれない、そして、その教会の基礎に自由と正義をおくことが出来るかもしれない、と考えていた³⁾。

のちにセイレム (Salem) の教職者となるヒギンソン牧師が船の上から母国に別れをつげた時、その子供たち

と他の旅客たちを近くに呼びよせて、つぎのようにいったという。

「われわれは分離派の人たちのように、さらば、バビロン、さらば、ローマ、とはいまい。そうではなく、われわれは、さらば、親しきイングランドよ、さらば、イングランドの神の教会およびそこにいるすべてのクリスチャンの友人たちよ、という。

われわれは、国教会から分離した者としてニューイングランドへ行くのではない。ただ、われわれは、その腐敗から離れざるをえないだけである。むしろ、われわれは教会改革の積極的な役割を实践するため、アメリカで福音を宣伝するために、行くのである。」

といて、イングランドの王と教会と国のために熱い祈りをささげた、といわれる⁴⁾。

注

- 1) マサチューセッツにたいする「第一の特許状」については、前掲『原典アメリカ史』第一巻 125頁以下を参照。(W. MacDonald, *Select Charters Illustrative of American History*, pp. 37—42.)
- 2) Charles H. McIlwain, *The Transfer of Charter to New England, and its Significance in American Constitutional History*, *Proceedings of the Massachusetts Historical Society*, LXIII, 1931, pp. 53—64.
- 3) ニューイングランド植民地の発展についての包括的な叙述はアンドルーズの右に出るものはない。

Charles. McL. Andrews, *The Colonial Period of American History*, 4 vols., New Haven, 1934—1938; do., *The Colonial Period*, N. Y. 1912, do., *Our Earliest Colonial Settlements*, N. Y. 1933.

Albert B. Hart, ed., *Commonwealth History of Massachusetts*, N. Y. 1927—1930, 5 vols.

Thomas J. Wertenbaker, *The Puritan Oligarchy: The Founding of American Civilization*, N. Y. 1947.

教会と市民政体についてのピューリタンの理論に関する当時の文献としてつぎのようなものがある。

Thomas Cobbet, *The Civil Magistrates Power In Matters of Religion Modestly Debated*, London, 1653.

John Cotton, *An Abrtract of Laws and Government*, London, 1641. これは“Moses His Judicials”と呼ばれ、実際には成文化されなかったが、当時の教職者によるものとして逸することが出来ないものである。田村稿「“Moses His Judicials” 研究序説」『政経論叢』Vol. 35, No. 2, 昭和41年, 参照。

また、比較的最近のものとしては、

Edward O. Maurer, *A Puritan Church and*

Its Relation to Community, State, and Nation, Addresses Delivered in Preparation for the Three Hundredth Anniversary of the Settlement of New Haven, N. H., 1938.

Clinton Rossiter, *Seedtime of the Republic: The Origin of the American Tradition of Political Liberty*, N. Y. 1953.

Frederick L. Weis, *The Colonial Clergy and the Colonial Churches of New England*, Lancaster, Mass. 1936.

Elizabeth O. Winslow, *Meetinghouse Hill: 1630—1783*, N. Y. 1952.

- 4) Cotton Mather, *Magnalia Christi Americana*, I, p. 328.

三

1628年9月、エンディコットのひきいる50余名のピューリタンが長い船旅ののち「ナウムケッグ」(Naumkeag)に到着し、この地を「セイレム」(Salem)¹⁾と改めた。さらに1629年の6月には英国王の「特許状」を携えた「マサチューセッツ湾会社」(Massachusetts Bay Company)²⁾の一団400人が、5隻の船に140頭の牛や40頭の羊とともにこれに加わった。彼らの事業はまず教会建設から始まった。

セイレムにおける情況記録は、セイレム教会の執事(deacon)であったチャールズ・ゴット(Charles Gott)の手による1629年7月30日付のブラドフォード総督宛の手紙に詳しい。

「7月の第20日に、神は我々の総督[John Endicott]の心を動かし給うて、一人の牧師と一人の教師を選出するために厳肅なるへり下りの日をわかし給いました。その日の前半は讃美と教えに用い、その日の後半は、つぎのように、選挙のために費やされました。考えられていた人々(その人々はイングランドで教職者でしたが)は、彼らの召し(calling)について求められました。彼らは二重の召命にあずかっていることを認めました。つまりひとつは内なる召命(inward calling)であって、主がある人に、彼の召命に応じるよう心を動かし給うことであり、第二(つまり外なる召命)は、人々からのものであり、信者の一団が、神の道にしたがって共に歩むために契約(Covenant)において結合して、すべての構成員(男子)が彼らの指導者を自由に選ぶことであります。」³⁾

当時セイレムには、ヒギンソン(Francis Higginson)、スケルトン(Samuel Skelton)、ブライト(Francis Bright)およびスミス(Ralph Smith)という聖職者がいたが、スミスは、セイレムが生ぬるい(つまり「分離派」から見れば保守的だという)理由で間もなく母国へ

帰り、またブライトは逆に、セイレムでの「会衆主義」的傾向を好まなかったようである。

結局、ヒギンソンとスケルトンが正式にセイレム第一教会の教職者として選任されることになる。ゴットの記録はなお続く。

「さて我々は、これらの二人が、テモテにたいして使徒がいわれたように、監督は責むべき所なく、品行正しく、能く教えることのできる、等々の資格を十分備えていることについて納得させられました。」「二人の選出はつぎのように行なわれました。すなわち、すべての資格ある教会員は、紙片に、彼が主に動かされて牧師(Pastor)として適していると思う人の名を、書きました。そして同様に、彼らが教師(teacher)となつてほしい人の名を書きました。その結果多くの人々が、スケルトン氏を牧師に、ヒギンソン氏を教師にすることに賛意を表しました。そして彼らはこの選任を承諾し、ヒギンソン氏が、3・4人の教会の重だった人々と共に、祈りをもって、スケルトン氏の上に手を按きました。

それがすむと、それからヒギンソン氏の上に手を按き、それから長老(elders)と執事(deacons)たちの選挙がおこなわれました。……」³⁾

二人の教職者が選ばれたことについて、ここで特に注目したいことは、その二人がスケルトンとヒギンソンであったことではない。彼らは元来、植民会社から任命された牧師であったからである。ここでの画期的な意義は、まず、教会員の手によって彼らが自発的かつ自由に選出されたということである。

セイレムの人々がその教会形成にあたって、自らの手で創り上げたこのきわめて重要な方式は、ニューイングランドの教会史上のみならず、アメリカ政治史上のユニークな伝統の源泉となる。

更に、特筆すべきことは、「契約」⁴⁾の起草と、それを礎石とした共同体形成の実践である。

教師ヒギンソンは「聖書の言」で「信仰告白」(Confession of Faith)と「契約」(Covenant)を起草し、その創立に加わった30人のオリジナル・メンバーのためにそれぞれ30部書き上げた。その「契約」の内容はおおよそ次のようなものであった。

「1629年第6月[8月]の6[日]この契約(Covenant)が公的に署名されかつ宣言された……

感謝のいけにえをもってわたしと契約をしたわたしの聖徒たちよわたしに集え。詩：50：5。

われわれ、ここに署名したものたち、現在セイレムのキリスト教会の教会員たちは、……われわれ自身の

慰めとわれわれに加わるであろう人々の双方のために、ここに厳肅に永遠の神のおん前において、この教会のはじめにあたりこの教会が結び合って、教会契約を新しくする…。すなわち：われわれは主なる神と、われわれお互いと契約し、そして、神のおん前にわれわれが互いに結合し、彼のすべての途を共に歩むこと……

1. 第一に、われわれは、われらの主をわれらの神とし……
2. われわれは主イエス・キリストにわれわれ自身を捧げ……
3. われわれは会衆の兄弟姉妹と共に、互いに行いに注意して、共に歩み……
4. 公的にも私的にも、教会を傷つけることは決してせず……
6. われわれは結びあって、内に関してもまた外に関しても、真と平和のうちに福音の前進を学び……
7. われわれはここに、教会あるいは民国 (Common Weale) におけるわれわれの上なるものについて、法にしたがった服従をもってつかえることを約し……
8. われわれは、特定の召命 (particular Callings) において、主にわれわれを証しすることを決意する……
9. われわれの子供たちや召使いたちに、神の智識とそのご意志を、心をつくして教えることを約束する……

この契約は1660年第1月の6〔日〕の厳肅なるへり下りの日に、教会によって更新される。……」

次の日曜日(8月6日)を「断食と祈り」(Fasting and Prayer)の日として聖別し、二人の教職者の「説教と祈禱」ののち、その「信仰告白」と「契約」を厳かに読み上げ、30人の会員がそれに同意することを表明した。このようにして、「セイレムの第一教会」(The First Church in Salem)は設立された。

注

- 1) セイレムについては The First Church in Salem of the Records, 1629—1736, ed. by R. D. Pierce, Salem, 1974 がある。
- 2) マサチューセッツ植民地についての原資料として、つぎのものがある。

Records of the Governor and Company of the Massachusetts Bay in New England, 1628—1686, ed. by N.B. Shurtleff, Boston, 1853—1854, 5 vols. [以下 *Mass. Bay Records*, と略記する]。

Records of the Court of Assistance of

the Colony of the Massachusetts Bay, 1630—1692 County of Suffolk, Boston, 1901—1928, 3 Vols. [以下 *Mass. Asst. Records*, と略記する]。

William Hubbard, *A General History of New-England from the Discovery to MDCLXXX.*, [1680], in: *Collections of the Massachusetts Historical Society*, Second Series, vols. V—VI, Boston, 1815, 1848, 1878.

Thomas Hutchinson, *A Collection of Original Papers Relative to the History of the Colony of Massachusetts-Bay*, Boston, 1769, reprint ed. Albany, 1865, in 2 vols.

Edward Johnson, *A History of New England. From the English planting in the Yeere 1628, untill the Yeere 1652...., or, The Wonderworking Providence of Sions Saviour in New England*, London, 1654, in: *Collections of the Massachusetts Historical Society*, Second, Series, Vols. II, III, IV, VII, VIII, 1814—1819; J.E. Jameson (ed.), *The Wonderworking Providence...*, in: *Original Narrative Series*, N.Y. 1910, 1959.

Cotton Mather, *A Brief Account of the State of the Providence of the Massachusetts-Bay in New England, Civil and Ecclesiastical*, Boston, 1717.

Nathaniel Morton, *New England Memorial; Or, A Brief Relation of the Most Memorable and Remarkable Passages of the Providence of Gad, Manifested to the Planters of New England in America; With special Reference to the first Colony there of Called New-Plimouth, Cambridge; Printed by S.G. and M.J. for John Usher of Boston, 1669.*

Eliot S. Morison, *Builders of the Bay Colony*, Boston, 1930.

John G. Palfrey, *A Compendious History of New England*, Boston, 1858—1890, 5 vols.,

- 3) "Governor Bradfords, Letter Book," *Collections, Massachusetts Historical Society*, 1st Ser., III, pp. 67—68.

40年後に出版されたモートン(上掲注②)の叙述によれば、二人の教職者の「任命式」がこの日(つまり8月6日に行なわれたと記されているが、ムーディ(Robert E. Moody)によれば(Introduction, *The Records of The First Church in Salem, Massachusetts, 1629—1736*, Salem, 1974), このセイレム教会の記録をのこしているゴットは、それを「7月30日」としているの、2回「任命式」があったのかもしれないし、またのちのニューイングランドの歴史家たち Morton も Hubbard も Mather も「8月6日」と記しているのは、相当の年数が経過しているため、2回を1回の出来事のように思いちがえたのかもしれない。いずれにせよ、これらの

記述の元になる記録は、当時まだ14才であったヒギンソンの息子の書いたものに依拠しているため、細部にわたる事柄についての信憑性は問題だとしている。

モートンの記録によれば、この記念すべき聖式には、ブリマスの総督ブラドフォードも何人かの人々と共にはるばる海路出むいて来たが、強い風にさまたげられて式の始めから参列出来なかったとはいえ、その後の「集会」(assembly)には間あって、「交りの右の手をさしのべ、そしてかかる良き始まりの上にすべての繁栄を成功あらんことを祈念した」という。さらにモートンは、この時設定された「信仰告白」と「契約」は、聖書に記されている「信仰」と契約を指し示している指針(Direction)と考えらるべきものであって、いかなる人もこれらの形式的なことばにしばられるべきではなく、福音の本質と目的と範囲が記されているだけのものであることが確認されたという。

したがって、その後あるものはこの「信仰告白」と「契約」にたいする同意表明によって入会を認められ、またあるものは一般に提示されている信仰の諸原理についての試問に答えることによって入会をゆるされ、さらにまたあるものは、個々人が自らの信仰告白を書面に認め、それを読み上げることによって教会員になることがゆるされたという。人によっては、自分のことばで、自分独自の方法によって、自らの信仰告白をしたものもいるといわれる。

この記念すべき出来事についてコトン・マザーは、その『ニューイングランド教会史』において、つぎのようなことを特記している。

「彼らは、すべてこの点、つまり、信仰深い人々の子供たちは、その両親と共に教会員であり、彼らに授けられた洗礼はそうであることのしるし(Seal)であること、についてはブリマスの兄弟たちと同意見であったが、ただ、彼らが特定の教会に入会する前に、彼らが悪しき行状からはなれていることを判定してもらう必要があったし、彼らは教会の長老たちに、彼らの適正が認められた上で、審査されなければならない、彼らは公けにまた個人的に契約(Covenant)を保持しなければならない、という点が異っていた。そうしたならばはじめて彼らは聖餐式に列することができた。…」

(Cotton Mather, *Magnalia Christi Americana: Or, the Ecclesiastical History of New-England, from Its First Planting in the year 1620, unto the Year of our Lord, 1698*, London, 1702, Book I, ch. IV, p. 19. (以下 *Magnalia* と略記する))。

- 4) 「セイレム第一教会」の“Covenant”については、*The First Chmch in Salem, Records, 1629—1736*, Essex Institute, Salem, 1974, pp. 3—5.

四

1630年3月29日、「アラベラ号」(Arabella)など17隻に分乗した1,000人のピューリタンはイングランドのサザンプトンを出帆し、ニューイングランドに向った。その航海中に、その指導者であったウィンスロップ(John Winthrop)¹⁾は、新世界において間もなく創設さるべき共同社会のために一文を草した。その「キリスト教的慈愛の模範」(“A Modell of Christian Charity”)²⁾と題された説教こそ、その当時のピューリタン移住者たちのための基本的な指針であった。

「……このようにして、神とわれわれとの間には〔特定の〕目的(the cause)がある。この目的遂行のために、われわれは契約(Covenant)を結んだのである。この目的ののっとって行動するよう言明したことについて、われわれ自らの契約書(Articles)を作成する。……神は特別の使命をあたえ給い、すべての規定が厳格に遵守されるようにと、見ておられる。

そして、もしわれわれがこれらの法律の遵守をおこたるならば、そしてまた、この世俗に耽溺し、肉の思いを満たし、われわれ自身とわれわれの繁栄のために大きなことを追い求めるならば、主はわれわれにたいして必ずや怒りを発し給い、そのような邪な人々にたいして報復し…。

われわれは一人の人間のように、この業において一つに結びあわせられ、同じ集団の成員としてわれわれの共同体をおぼえなければならない…。

そうであるから、難破を回避し、われわれの繁栄に備えるためには予言者ミカのすすめにしたがって、公義を行ない、いつくしみを愛し、へり下って神と共に歩むべきである。その目的のために、われわれはあたかも一人の人間のようにこの事業においてひとつに結び合い、互いに兄弟愛をもたなければならない。そして共に労苦し、共に悲しみ、謙遜と忍耐とをもって助け合い、互いに喜び楽しむならば、神はわれわれの神となり、喜びをもってわれわれの間に住み給う。……

われわれは丘の上の町(City vpon a Hill)のごときものとなり、すべての人々の目がその上に注がれていることを考えなければならない。そして、もしわれわれがこの事業において、われわれの神に正しく対処することに失敗するならば、いま従事している事業から神はその援助の手をひかれることになるであろう。そして、その時われわれは、世界の人たちの笑い種になるでしょう。……

それゆえ、われわれは生命を選ぼう、何となれば、われわれ、そしてわれわれの子孫(Seede)が生きながらえるように。神のみ声に従い、そして彼に仕か

りと連なっていよう。何となれば、彼こそわれわれの生命であり、われわれの繁栄なのだから。」

「すべての人は他を必要としている。それゆえに人々はお互いに兄弟愛のきずな (in the bonds of brotherly affection) によっていっそう緊密に結びあう」ことが、神のみ心であり、そしてまたわれわれの幸いと繁栄でもある、とウィンスロップはいう。

初期のマサチューセッツ湾植民地および、その後次々と新しく作られていく各地の共同体は、このような理念のもとに建設された「契約共同体」(Covenanted Community) であったというべきであろう³⁾。

しかしながらその場合、彼らの理念と現実の生活にふさわしい教会組織は如何なる形態のものであるべきか、について、指導者たちの間ではじめから意見の一致を見ていたわけではないが、「分離派」がその当初からたどることになった「会衆主義」でなかったことはたしかであった。ピューリタンたちは主教 (Bishop)——ここでは国教会の教区牧師 (Rector) とは異なる職能ではあったが——の指導のもとに教会形成を試みている。

例えば、入植当初の最も有力な牧師であるジョン・コトン (John Cotton)⁴⁾ は、英国のボストンにおける聖ボトルフ教会 (St. Botolphs Church) の教区牧師であったが、彼は同教区の大半の信徒を伴い、新天地での教会形成に尽力している。この教会は英国国教会との親密な関係を維持しつつ、ただその教理と礼拝を「聖化」し、現実と直面する複雑な諸問題にたいして、国教会の制度化された権威の支配にしばられることなく、自由に対応することが出来たのであった。

しかしながら、このボストンの教会も日毎に直面する教会政治上の諸問題に対処するにさいして、すでに10年間あのプリマスで試みられてきた経験や教訓が、きわめて大きな影響力を持つようになって行く。

プリマスで次第に明確な形態をとるようになった、いわゆる「会衆主義」はまずビルグリムスのフラー博士 (Dr. Fuller) という医師によって、まずセイレムのピューリタンに伝えられたのが最初だといわれている⁵⁾。

フラー医師はセイレムのピューリタンたちの間に伝染病がはやった時に、医療とともに、自由な契約を基礎にした新しい教会形成について説いたといわれている。

セイレムの人々は、この方法にしたがって新約聖書にのっとり1628年に「契約」を作成し、以前教区牧師であった二人の聖職者を選任したことはすでにのべた。とはいえ、セイレムの教会は依然として国教会の膂の緒をたち切ってはいなかったのである。セイレムの教職者であったスケルトン (Skelton) とヒギンソン (Higginson) が、この新しい取りきめの事の次第を植民地議会のエン

ディコット総督 (Governor Endicott) に釈明を求められたとき、彼らは、「彼らは分離派でも再洗礼派でもなく、また彼らは英国国教会、およびその中にある神の誠めから離れたりするものではなく、ただ、近年その教会に見られる腐敗と無秩序から離れようとするにすぎない」ことをのべている⁶⁾。

注

1) マサチューセッツ入植についての原資料としてはウィンスロップのものがある。

Winthrop's Journal, "History of New England", 1630—1649, 2 vols, Original Narratives of Early American History, N. Y. 1908, (1953); The Winthrop Paper, I, II, Massachusetts Historical Society, Boston, 1931.

2) *A Modell of Christian Charity, Written on Boarde the Arrabella, On the Atlantick Ocean, By the Honorable John Winthrop Esquire, Anno 1630. in: Winthrop Paper, vol. II.*

3) *Mass. Bay Records, I. : Arthur B. Ellis, History of the First Church in Boston, 1630—1880, Boston, 1881.*

4) コトン牧師については前掲 Ziff, *John Cotton* が良い。彼の活動や説教についての資料は Perry Miller and Thomas H. Johnson (ed.), *The Puritans: A Sourcebook of their Writings, 2 vols., Revised ed., Harper Torchbooks, N. Y. 1963.* 参照。

5) セイレムの教会規律の形成にあたって、プリマスの影響が強いと主張するのはペリー・ミラーであるが、この主張はその後の研究家たちによって、疑問視されている。その対極的立場に立っている研究者の一人にラザール・ジフ (Larzar Ziff) がいる。(Miller, *Orthodoxy: Ziff, "The Salem Puritans in the Free Aire of a New World," Huntington Library Quarterly, XX, 1956—1957, pp. 573—584.*)

この問題に関する最近の研究については, Michael McGiffert, "American Puritan Studies in the 1960's," *William and Mary Quarterly, 3rd Ser., XXVII, 1970.* にくわしい。

6) John Brown, *The Pilgrim Fathers in New England and Their Puritan Successors, London, 1895.*

7) Cotton Mather, *Magnalia, I, p. 328.*

五

ニューイングランドのピューリタンたちにとって、その「宗教」こそ日常生活における第一の関心事であったことは多言を用しないであろう。

彼らにとって神はたとえいま明らかに認識しえない対象であったとしても、またそのなし給うことが人々の理解を超えたものであったとしても、創造主なる神は彼ら

の日毎の生活の中で唯一の生ける現実であった。神はそのご計画にしたがって世界を創造し、また日毎に創造し給い、その主権をもって歴史を司り給う。神は絶対者として、人の思いをはるかに超えて自由にその被造物を支配し給う。その神のなし給うことに絶対的に服従することが、被造物の義務であり、幸いである、と彼ら固く信じて疑わない。

ピューリタンの信仰にとって第二の根本的な原理は、「聖書」は「神の言」であり、すべての真理がその中に含まれているということである。したがって彼らはその主張するすべての命題を、ひとつひとつ「聖書の言」によって裏付ける必要があった。とくに「契約」「信仰告白」は勿論、個々の法律や取り決めにいたるまで、おびただしい聖書本文の引用や適用が見られるのは、そのためである。

しかし、彼らは決してまたいわゆる「ファンダメンタリスト」ではなかった。聖書——啓示された神の意志——は究極的な権威ではなく、その裏に更に深い、隠された神の意志があると信じていた。この「啓示された神のみ心と隠された神のみ心」との間隙に、ニューイングランドのピューリタンたちの思想上に固有な発展が見られるのである。

ピューリタンの信仰の第三の重要な原理は「原罪」(original sin)であった。すべての人はアダム以来、神の恵みと秩序を犯して罪に堕ちたのみならず、人々は日々、それに自らの罪をつけ加えている。この罪にたいして人々ははたすべき責任がある。しかし、人間はいかに努力してもこれを償い、自らを救う力を持っていない。

ピューリタンの救済論の特長は、全能の神の前で、罪に堕した人間がいかにして救われうのか、ということころに見られる。

人間は自身で自らを聖めることが出来ないのだから、もし救われるとすれば、神の一方的な恩恵による筈である。救済の第一段階は「義認」と呼ばれる神の「恩恵によるゆるしの業」である。「義」と認められた「罪人」は、神に応答する力をあたえられる。つまり、救済の業によって神がその人の中に新しい生命をあたえ給う。人は神の恵みによって「新しい人」となる。では、いかにしてこのことが可能となるのかについては、人には全く隠されている。「再生」は秘義である。更に困難なことは、この神の恩恵の業を受けているかどうかについては誰も知りえないということである。

この自己の救済のたしかさを知りえないという事態は、信仰者にとって最大の悩みであった。ニューイングランドのピューリタンたちも、自らが救われていることを確認したいという願いをもちつつ、常に心の奥深く不

断の戦いがあった筈である。平安を求めて人知れず懊悩した魂の戦いの軌跡は、同時代人の「日記」の中におびただしく見ることができる。

『「……ピューリタンの時代には、人々は自分の魂の内部に予定の法が働いていることを徹底的に精査するよう教えられた。『再生』の過程について何らの力も持っていない彼らにとって理論的に彼らの出来ることはただ凝視することであった。彼らは、自らの胸の内側で演じられているドラマを観る証人であった。したがって彼らは、それを息をこらして見つめるのであった。彼らは、神がその再生の業において示される恩恵のしるしをもとめて、隠された思いの奥深く目をこらしたのであった。』¹⁾

さらにニューイングランドのピューリタンの特長は、このような救済理論を日常生活の隅々にまで適用したところにある。その特性を一言でいえば、ニューイングランドの信者たちは神の言の行為者であったということである。神の正義にたいする彼らの絶対的信頼は、入植の過程にしばしば随伴する諸困難にも打しいがれず、それらを克服するに十分の意志と力をあたえた。個々の信者の間には自らの救いのたしかさに迷うことがあったとしても、全体としては、いかなる逆境も必ずや神がそれを償ってあまりある恩恵をくだし給い、すべてを神のみ心にしたがって回復し給うであろうと確信していた。行く手をさえぎる暗く厚い雲の彼方には、まばゆいばかりの栄光が輝いていることを常に信じていたニューイングランドの人々は、神を信じた強靱な楽観主義者であった²⁾。

マックス・ウェバー (Max Weber)³⁾ がカルヴィニズムの予定説と「資本主義の精神」の構造との間に親和関係のあることを主張したが、ニューイングランドのピューリタンはカルヴィニズムの予定説よりはエイズ (William Ames) やパーキンス (William Perkins) の影響が強いことを主張したのは、モリソン (Samuel E. Morison)⁴⁾ であった。かれは、ニューイングランドの教職者たちがその教説の中で教父たちの教えと共にこれらの英国の神学者たちの言葉をしばしば引用し、かつその説教においては、カルヴァンが人間の救いは神の義と審判の前に隔絶したものだと主張するのにたいして、人の救いはすべての人々の手のとどくところにあることを強調し、「恩恵の契約」(Covenant of Grace) および諸教会のたゆみない努力によって、それは可能となると説いている、という。ニューイングランドのピューリタンは、個々人は神の御心にしたがって作られたこの世界の中で、それぞれ個々人の役割と場をあたえられており、

神はその個々人とその働きに親しく関心をよせておられることを確信していた。

ここでいう「契約」(Covenant)⁵⁾という概念は、信仰者がまず神にたいし、さらに信徒会衆が相互に、信仰と聖徒の交りをつづけていくことを誓い合うことを意味する。それは特別な「ちぎり」であり、結合(bond)であって、信徒はその「ボンド」に拘束される。この「契約」によって結び合わされた信仰者が「会衆」(congregation)であり、「見える教会」(visible church)を形成する。

「恩恵の契約」が「業の契約」と異なるところは「儀文」や命令によってではなく、恩恵にたいする感謝と喜びをもって、神の命令に服従するところにある。「恩恵の契約」は個々の信徒の中に新しい生命を生ぜしめ、罪の無条件的なゆるしの約束は神に向う新しい生の活動を促さずにはおかない。この契約において、神と人は生ける人格的な関係に入る。この人格的關係の中で、神の命令(Commandment)は、それ以前とはまったく次元の異ったものとして受け入れられることになる。つまり、人はこの契約関係において、神の命令にたいし「新しい服従」をもって従う主体となる。神の恩恵によって救い上げられ、新しい神の国の建設に喜びをもって従事しようとする倫理的主体性がここに確立する。「見える聖徒」(visible saint)がそれである⁶⁾。

ニューイングランドの会衆たちは自らこのような「選ばれた民」であり、「神の戦士」であることを誇りををもって告白している。

大木英夫の研究によれば、「契約神学」はすでにイギリスにおいて十分に組織化されていたという。その研究に利用されている17世紀初頭の代表的なピューリタンの思想を引用させていただこう。

「この契約とは何か。あなたがたは次のことを知らなければならない。契約は二重である。業の契約があり恩恵の契約がある。業の契約は次のようである。『これをなせ、そうすればあなたは生き、わたしはあなたの神となろう。』これはアダムと結ばれた契約であり、モーセによって『これをなせ、そうすれば生きる』という道徳的律法においていいあらわされたものである。第2は恩恵の契約である。そしてそれはこうである。『信じなさい。わが子をあなたの主として受けとりなさい。そしてあなたは同じく義の賜物を受けいれなさい。それは彼によってあなたの罪のゆるしのため、わたしとの和解のためもたらされたものである。そしてそれによってあなたはわたしへの愛と服従とに育ちなさい。そうすればわたしはあなたの神となり、あなたはわたしの民となるだろう。』⁷⁾

神はその恵みを自由にあたえ給う——これが「恩恵の契約」といわれる信仰であるが、それはまず、神の絶対性と全能とともに、人間の根源的な類落性の告白にはかならない。

人はこの「恩恵の契約」を受ける何らの資格も能力もない。信仰さえも神の恵みによってあたえられるものである。もし、神が人を救いに予定し給うているならば、かれは人に信仰とともにその契約を成就する力をあたえ給う筈である。

この教理はさまざまな方法で展開されることになる。「信仰のみ」を極端に強調したアン・ハッチンソンの「アンチノミアリズム」⁸⁾はそのひとつであった。

ニューイングランドの教職者たちは、牧会の過程で神の救いのめぐみわれわれに及んでいるとすれば、その働きを容易にするために、人々はその「準備」をする必要がある、とすすめる。

牧師たちは、神のめぐみの前には人間の業は無にひとしいことをくりかえし説いてはいるが、かれらが人々に救いのめぐみにあずかるにふさわしい「備え」をするようにすすめることによって、どちらかといえば「み言を行うこと」に強調点がおかれていたといえよう。そして、牧師たちはむしろ「信仰」によって救われることを強調したとしても、一般の会衆は意識的・無意識的によりやさしい、手近かな「業」の実践において救いのたしかさを手に入れようとする抜きがたい傾向にあった。

ウィンスロブさえも、つぎのように告白している。

「最近ここで教えられた自由な義認の教理は、私に眠気をさそう。というのは、私の思い出す限り、この20年間、[私の信仰は]すべての働き[業]が新生の始まりであるという低い(私の自身の評価によれば)段階にあったからである。しかし、平和の音がやってきた時、それは、私が以前得ていたと同じものであることを知った。……」⁹⁾

「恩恵の契約」の及ぶ範囲についてシェパード(Thomas Shepard)はつぎのようにいう。

「旧約においてアブラハムと結ばれた契約は、新約におけるそれと本質的に同一のものであり、この新約の下にあるものは、旧約の下にあるアブラハムとまさに同一のものである。」¹⁰⁾

そして更に、このアブラハムとの原契約は、彼のみでなく、彼の「種」(seed)も同様に含まれるものであり、この「種」は「代々」の信者を意味するとすれば、ピューリタンたちは勿論、その家族のすべてを含む筈である。この「恩恵の契約」の有無は人間にとって隠されているのだから、それを客観的に証明することは出来ない。しかし、ニューイングランドのピューリタンたち

は、「分離派」のように真の回心者のみが選ばれた者として恩恵にあずかっているとはしないで、彼が神を信じ、新しい神の国建設のためにその生命と生涯とを捧げているということは、彼自身のみではなく、彼の家族もこの約束と事業の成就に責任があることを意味している。アブラハムの契約を受け入れるものは、全てこの同じ責任を引き受けることなのである。

「若し、神が契約を結び給うたとすれば、汝と汝のもの (thee and thine) にとっての神なのである。」「したがって、汝らの子たちと奉公人たちが神の民となるべく見守ることが、汝 [家長] の責務 (thy part to see it) なのである。」と、牧師ジョン・コトン¹⁾はいう。

さらにコトンは「若し、われわれが神に従順であろうとするならば」「われわれ自身の名のみならず、われわれに属するすべての人々……妻、子供、奉公人、親族、知人、およびわれわれの下にあるものであろうと、対等のものであろうと、われわれの接するすべての人々の益のために従うのである。」²⁾

「恩恵の契約」の下におかれているこれらすべての人々は、神の民としての当然のつとめとして、聖日遵守が義務づけられることになる。

シェパードはいう。「われわれの子供、奉公人、およびわれわれの家に滞在しているよそもの (Strangers) は、聖日を守らない傾向にある。したがってわれわれは、神のために、彼らにたいし、罪を避け、聖日を聖く守ることを強制 (constrain) するため、われわれの権力を行使 (impose our power) すべきである。」

家長は、自身のみならず家族全員にたいして、契約のもとに正しく神の道に歩むことを指導する責務が課せられており、家族は、この指導者にたいし、犠牲の生活を示し、市民生活において良い行状の模とならねばならない。この家族にたいする善行指導のための強制力こそは、すべての教会および市民政治における社会的権力の「幼芽」であった。

アブラハムの契約が「イスラエルのすべての族」をすべて含むものであったとすれば、ピューリタンの契約は、家長自身のみならずその家族および、すべてのキリストを信ずるものを意味するものであった。したがって、キリスト教会やキリスト教国の構成員はすべてこの神の契約の下にしばられていると考えるのは当然であった。

しかし、問題はそう容易ではなかった、この事情がその後のニューイングランド社会の特性を形成することになる。

ボストンやセイレムのピューリタンたちも「分離派」と同じように、信仰を告白し、行状の正しい人々、つま

り「目に見える聖徒」(visible saints) のみを教会員とし、選挙権を有する資格者とし、それ以外の人々を排除しようとする。しかしながら、彼らはいつも「良い麦」の中に「毒麦」が混在していることを告白せざるをえなかった。

「あなた方は良い麦と毒麦を見るように、良い家庭の中にも、あなた方は良いものと悪い者との混在を見るであろう。」

もし、事情がこのようだとすれば、家族、教会、国家を含めた救済を問題とする「恩恵の契約」は、いかにして成就可能なものであろうか。ピューリタンたちのこの問題にたいする答えは、必ずしも説得的ではない。かれらはこの困難な問いにたいして、単一的な解決法を示さず、契約には「恩恵の契約」のほかに団体の契約 (「家族の契約」「教会の契約」および「国家の契約」) がある。それらの契約に参加しているグループは、信仰よりはむしろ外的服従の如何が重要な救済のしるしであり、彼らは「永遠の救い」よりは外的な繁栄が約束される、とする。この種の団体の契約は、「イスラエルの族」に対する契約と同様、この世にかかわるものである、という。

神はこれらの一般のイスラエルの民に向って、「心をつくし、精神をつくして」神に服従することが出来なかったとしても、すくなくともその「律法」を故意に犯すことによって、神の名をけがすことのないように努めることが出来る筈だ。そのように、ニューイングランドの人々も、神の戒めにたいし、たとえ外面的にでも服従することが出来るならば、神はその民として、外的な繁栄を約束する筈である。しかし、もし、それをも守れないとすれば、神は、ソドムやゴモラのようにこれを滅ぼすであろう。ニューイングランドの人々は「恩恵の契約」をいつの間にかこのように理解するようになる³⁾。

注

- 1) William Haller, *The Rise of Puritanism: or The Way to the New Jerusalem as set forth in Pulpit and Press, 1570-1643*, N. Y., 1938, pp. 90-91.
- 2) ニューイングランドのピューリタンズムの特性についての精細な分析と把握はベリー・ミラーにまざるものはない。
Perry Miller, *The New England Mind: The Seventeenth Century*, N. Y., 1939.
- 3) Max Weber, *Die protestantische Ethik und der ›Geist‹ des Kapitalismus*, 1904-5, 梶山・大塚訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 岩波文庫, 上・下。

これに関する論考は枚挙にいとまがない。しかし、中でも大塚久雄のものは依然として最良の研究であろう。「マックス・ウェーバーにおける資

本主義の『精神』ほか『大塚久雄著作集』第8巻所収の諸論文参照。

- 4) Samuel Eliot Morison, *The Puritan Prosaos*, N. Y. 1936, pp. 10-11.

この種の研究として逸することの出来ないのは、大木英夫『ピューリタニズムの倫理思想』、新教出版社、1966。である。

- 5) Miller, *New England Mind: Seventeenth Century*, ch. 4.
- 6) Morgan, *Visible Saint*.
- 7) Preston, *The New Covenant*, 1639, p. 315. 大木英夫「ピューリタンの契約神学」(II)東京神学大学神学会編『神学』XXV, 80-81頁より引用。
大木, 上掲書 102頁以下。
- 8) アンチノミアン論争については, Charles F. Adams, *Three Episodes of Massachusetts History*, Boston, 2 vols, chapter 2.
- 9) Winthrop, January, 1637.
- 10) Thomas Shepard, "Thomas Shepard's Election Sermon, in 1638", *New England Historical and Genealogical Register*, XXIV, 1870, pp. 361-366.
- 11) John Cotton, *The Way of Life*, London, 1641, p. 91.
- 12) Do., *Christ the Foundation of Life*, London, 1650, pp. 38~.
- 13) Miller, *New England Mind*, pp. 365-401.

六

ニューイングランドの四つの植民地 (Massachusetts Bay, Plymouth, New Heaven, Hartford) の諸教会はそれぞれ特有の個性をもっていたが、共通部分がむしろ大きかったといつてよい。その中で最も基本的なものは上述のように「契約」(Covenant) の上に立てられた教会だということである。教会設立ののちに新しく加えられる会員は、しかるべく任命された委員による慎重な審査を経て、投票によって決定され、「契約」に署名することによって正式の会員とされた。この方式は、教会員の資格についての多少の相異があるにしても、大体共通していた。

1636年頃までは、教会員を「信仰の篤い人」(godly-men)あるいは「見える聖徒」(visible saints)だけに限定する教会はなかったといつてよい。しかし、当時の教会において「見える聖徒」であるためには、自分たにいても、また他人にたいしても特別な証しを必要とした。彼自身、良き信仰をもち、善き行状を示すのみならず、厳しい試問と証言による裏付けによって、その信仰が固い確信に貫かれていることを証ししなければならなかった。とくに本人の個人的な「回心経験」(conversion experience) がなければならなかった。

男子の場合には広範囲にわたる、しかも徹底的な口答試問に通過せねばならず、女子の場合には、自己の宗教体験と信仰告白を書面で提出することが、要求されていたから、ごく普通の住民にとってはきわめてきびしい関門であった。その指導者たちは教会員を含むタウンの全住民をも、「神の言」にしたがって「統治」する責任があると感じていた。この「ニューイングランド方式」(New England Way) と呼ばれる神政一致の制度はセイレム、ボストン、ニューヘイブンの諸タウンで一般的に見られるところである。教会員はまた市民権の要件であったし、タウンの公的決定に参与する義務と権利を持っていた¹⁾。したがって彼らは公共の福祉にたいする共通の義務感を持っていた。

マサチューセッツにおいては、総督および議会のすべて代議員 (Legislature) たちは当然のこととして教会員であることが必須であったし、植民地の官職についている人々は、ほとんどその地方の諸教会の指導者であった。彼らは、植民地内で物議をかもし出す人々を排除することに躊躇はしなかったし、彼らの本来の「目的」(cause) に批判的な言論もゆるさなかった。

セイレムの最初の入植者中、セイレムの教会形成の方式を批判した三人の人は母国へ追いかえされたし、クエーカー教徒は異端の理由で断罪され、追放された。ロードアイランドにのべられたロジャー・ウィリアムズ (Roger Williams) もそうであったし、アンチノミアンとされたアン・ハッチンソン (Mrs. Hutchinson) も異端者とされた。

教会の指導者たちの理解では、彼らの教えは「聖書」以外のものを基準にしたものだというわけである。

それにもかかわらず、非教会員たち——その数はますます多くなって行くが——は、市民権が認められていない上に、教会および議会の決定に批判的なものにたいする処罰や追放といったやり方には不満であった。ウィリアムズやハッチンソンやクエーカー教徒にたいする同情者もすくなくはなかった。

この種の反対や事件のたびに指導者たちや教会員たちは、自らの聖書解釈や「聖書の言」をそのまま教会政治と世俗政治を規制する法律文書と見なすことについての可否を問われるのであった。

このようにして選び分たれた「聖徒」たちは、一般の会衆とは区別され、彼らのみが「聖餐式」につらなることができ、その子供たちは洗礼を受けることができた。これらの「聖徒」こそ教会の究極的な構成者であり、管理者であった。この教会員がタウンあるいは植民地人口の多数派を構成している限り、——植民地時代の初期の数年間がそうであったように——その社会には秩序と

調和と平和があった。

個々の教会には、正規の教会員によって選ばれた「牧師」(minister, paster), 「教師」(teacher), 「長老」(elder) および「執事」(deacon) という教会役員がいて、ひとたび選ばれてそれらの職につくと相当の権力をふるうことが出来た。とくに前二者は神の代理者として人々に畏敬された。「牧師」は教会員の魂を看とり、会衆を牧し導き、「教師」は教理上の指導を担当し、「長老」はこれらをたずけて会務を司り、「執事」は会計上の諸問題を担当した。

マサチューセッツでは、英国国教会の要請にもかかわらず、「監督」(Episcopacy) による教職者の任免、「祈禱書」(Prayer Book) の使用、および「公開聖餐式」(Open Communion) など、国教会の慣行や儀式などを採用せず、説教(Sermon)を中心とする独自の礼拝形式を生み出していた。とはいえ、彼らはまだ自覚的に国教会と「分離」するまでにはいたっていない。

1640年代において、議会は、市民権取得のための資格を十分備えていながら、公的義務負担をのがれようとして、故意に「宣誓」をしようとしないう者が多くなっていることを批難しているが、更に奥地へと新しいタウンが建設された場合、ボストンの議会まで、あるいは地方の郡議会までわざわざ出向いてまで「自由民」の資格を取得することがわずらわしいと考える人々が多くなったであろうと思われる⁹⁾。

したがって、年を経るにつれて、住民の絶対数が増加する一方(表1)、教会員つまり投票権を持つ市民となる

人の数は、相対的にますます減少する傾向にあった。バルフレイ⁸⁾によれば、1643年において、マサチューセッツ湾植民地の人口15,000人の中、有権者は1,708人であり、プリマスでは人口3,000人の中、有権者は230人しかいなかったという⁹⁾。また最近の研究、例えばウォール(Robert E. Wall)の推計(表2参照)によれば、1647年の時点で、四つの郡における主要なタウンの21才以上の成人男子の人口2,543人中、有権者は1,210人(47.6%)であったという。ただし、利用可能なデータが限られているので、この割合はミニマムの数値とされている。

さらに湾植民地の諸教会に正規の教会員として入会を認められた会員数の推移については、例えば、シモンズ(Richard C. Simmons)の計算に見ることが出来る⁹⁾。これは湾植民地内の主要な教会を含んでいるから、これによって植民地全般の趨勢をおしはかることが出来るように思われる。

表3に見られるように、1640年代以降そして、とくに1664年以降の男子教会員の新規入会数の急激な低下は、湾植民地内の人口が1640年から1680年代までに4倍になったのを考慮に入れた場合、いっそう深刻である。

このように、その後陸続と入植する人の数が増えてくるにつれて、タウンの新設もすすみ、教会も増えていった。15・6年後には、マサチューセッツ湾植民地には23の教会を数えるほどに成長した。

これらの教会とタウンでは、ほとんど初めから、それぞれ独立的性格を保持し、その行政もそれぞれ自律的に

表1 ニューイングランドの人口(推定)
(1620—1660)

		N. H.	%	Mass.	%	R. I.	%	Conn.	%	計
1620	白人	—	—	102	—	—	—	—	—	102
	黒人	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1630	白人	500	—	506	396	—	—	—	—	1,006
	黒人	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1640	白人	1,025	205	8,782	1,635	300	—	1,457	—	11,564
	黒人	30	—	150	—	—	—	15	—	195
1650	白人	1,265	23	13,742	56	760	153	4,119	183	19,885
	黒人	40	33	295	97	25	—	20	33	380
1660	白人	1,505	19	19,660	43	1,474	94	7,955	93	30,594
	黒人	50	25	422	43	65	160	25	25	562

(注) %は10年毎の増加率を示す。

(出所) R. C. Simmons, *The American Colonies, From Settlement to Independence*, Longman, 1975, p. 24 より一部補正して作成。

表 2 1647年の成人男子人口と有権者数

郡	タ ウ ン	成人男子人口 (1647)	自 人 数	%
Suffolk	Boston	389	208	53
	Dedham	107	64	60
	Dorchester	103	65	63
	Roxbury	94	59	62
	Braintree	87	37	43
	Hingham	79	32	41
	Weymouth	68	37	54
	Hull	9	5	56
小 計		936	507	54
Middlesex	Watertown	150	62	41
	Charlestown	129	84	65
	Cambridge	121	68	56
	Sudbury	61	30	50
	Concord	55	36	65
	Woburn	55	27	49
	Reading	28	9	32
小 計		599	316	53
Essex	Salem	246	104	42
	Ipswich	277*	67	29
	Newbury	115	51	44
	Rowley	77	42	56
	Gloucester	58	15	26
	Wenham	30	16	53
	Andover	20	9	45
	Manchester	15	5	33
小 計		788	309	38
Norfolk	Hampton	73	25	34
	Salisbury	68	30	44
	Haverhill	36	16	44
小 計		177	71	40
	Springfield	43	7	16

 (出所) Robert E. Wall, *op. cit.* (* 227 かー田村)

 表 3 マサチューセッツ諸教会への新規入会者数
(男子) (1630 s~1680 s)

教 会 名	年 代				
	1630s	1649s	1650s	1660s	1671—86
Beverly, 1667-87	—	—	—	39	22
Boston First, 1630-86	265	121	31	75	60
Boston Second, 1650-86	—	—	18	20	79
Boston Third, 1669-86	—	—	—	36	54
Cambridge, ca. 1636-67	52	27	14	18	—
Charlestown, 1632-86	98	42	26	24	39
Dedham, 1637-67	38	43	7	11	—
Dorchester, 1636-86	66	27	24	14	47
Roxbury, ca. 1630-86	112	31	21	15	49
Rowley, 1665-86	—	—	—	36	30
Salem, ca. 1630-50, 1660-69	111	82	—	32	—

 (出所) Richard C. Simmons, "Godliness, Property and the Franchise in Puritan Massachusetts: an Interpretation," *Journal of American History*, no. 55, 1968-69.

運営さるべきことが容認されていた。

しかし、教会員資格(そして、それと密接な関連のある「自由民」としての資格)や特権の具体的な内容の確定には、しばらくの間迂余曲折が見られた。時にはニューイングランド植民地の存在をゆるがすほどの論争も見られることになる。

注

1) マサチューセッツ湾植民地における市民権についての研究はきわめて魅力的なテーマではあるが、またむずかしい資料処理上の問題がある。このテーマについての主要な研究をいくつかあげると、つぎのようなものがある。

B. Katherine Brown, "Freemanship in Puritan Massachusetts", *American Historical Review*, No. 59, July 1954, pp. 865-883. do., "Puritan Democracy: A Case Study (Cambridge)", *Mississippi Valley Historical Review*, 50, 1963. do., "Puritan Democracy in Dedham, Massachusetts: Another Case Study", *William and Mary Quarterly*, 3rd Ser., 24, 1967.

Samuel Eliot Morison, *Builders of the Bay Colony*, Boston, 1930, とくにその Appendix 参照。

Stephen Foster, "The Massachusetts Franchise in Seventeenth Century", *William and Mary Quarterly*, 3rd ser., 24, 1967, pp. 613-623.

2) *Winthrop Paper*, IV, p. 190.

3) Palfrey, *op. cit.*, Vol. II, pp. 5-8.

4) Robert E. Wall, Jr., "The Massachusetts Bay Colony Franchise in 1647", *William and Mary Quarterly*, 3rd ser., 27, 1970, pp. 136-144.

5) Richard C. Simmons, "Freemanship in Early Massachusetts: Some Suggestions and a Case Study," *William and Mary Quarterly*, 3rd Ser., No. 19 1962, pp. 422-428; do., "Godliness, Property and the Franchise in Puritan Massachusetts: an Interpretation," *Journal of American History*, no. 55, 1968-69, pp. 495-511.